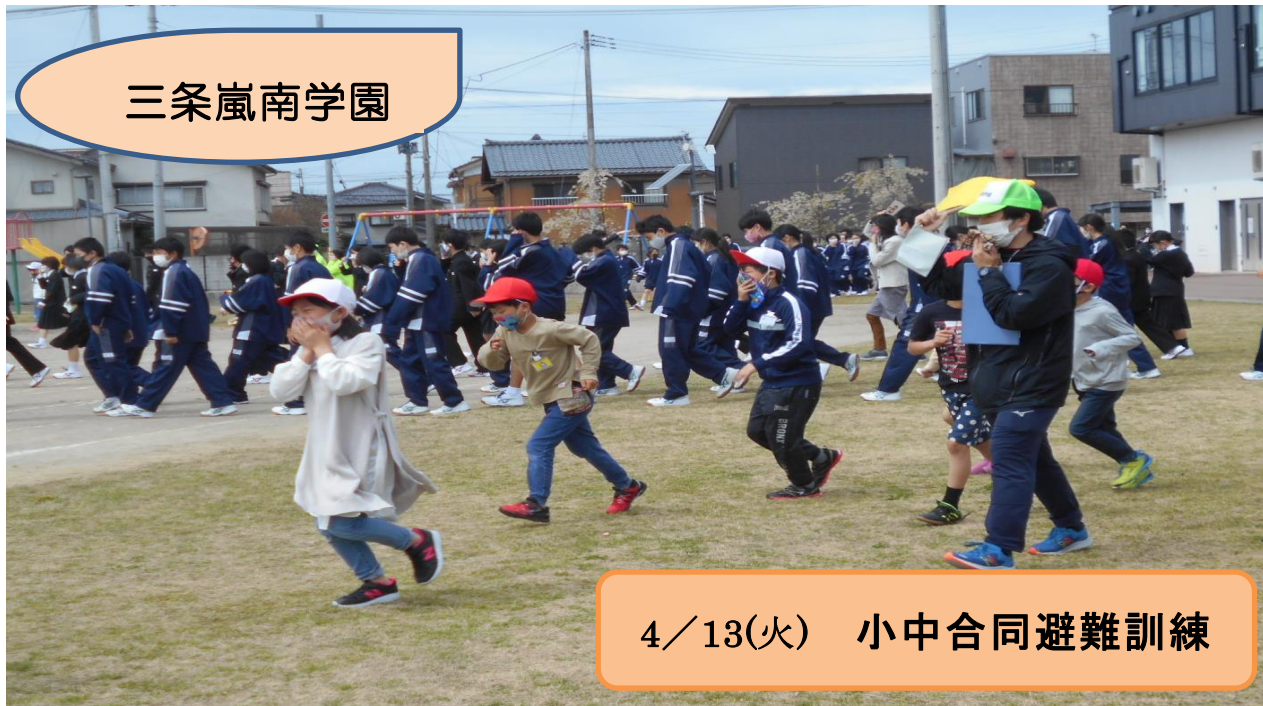


ほ ど 教育センター通信

火床の火の心を紡ぐ

第2号（通算85号）
令和3年5月28日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター 発行

三条嵐南学園



4/13(火) 小中合同避難訓練

一人一人を大切にする授業 ～小中一貫教育の価値を高める～

教育センター長 星 徹

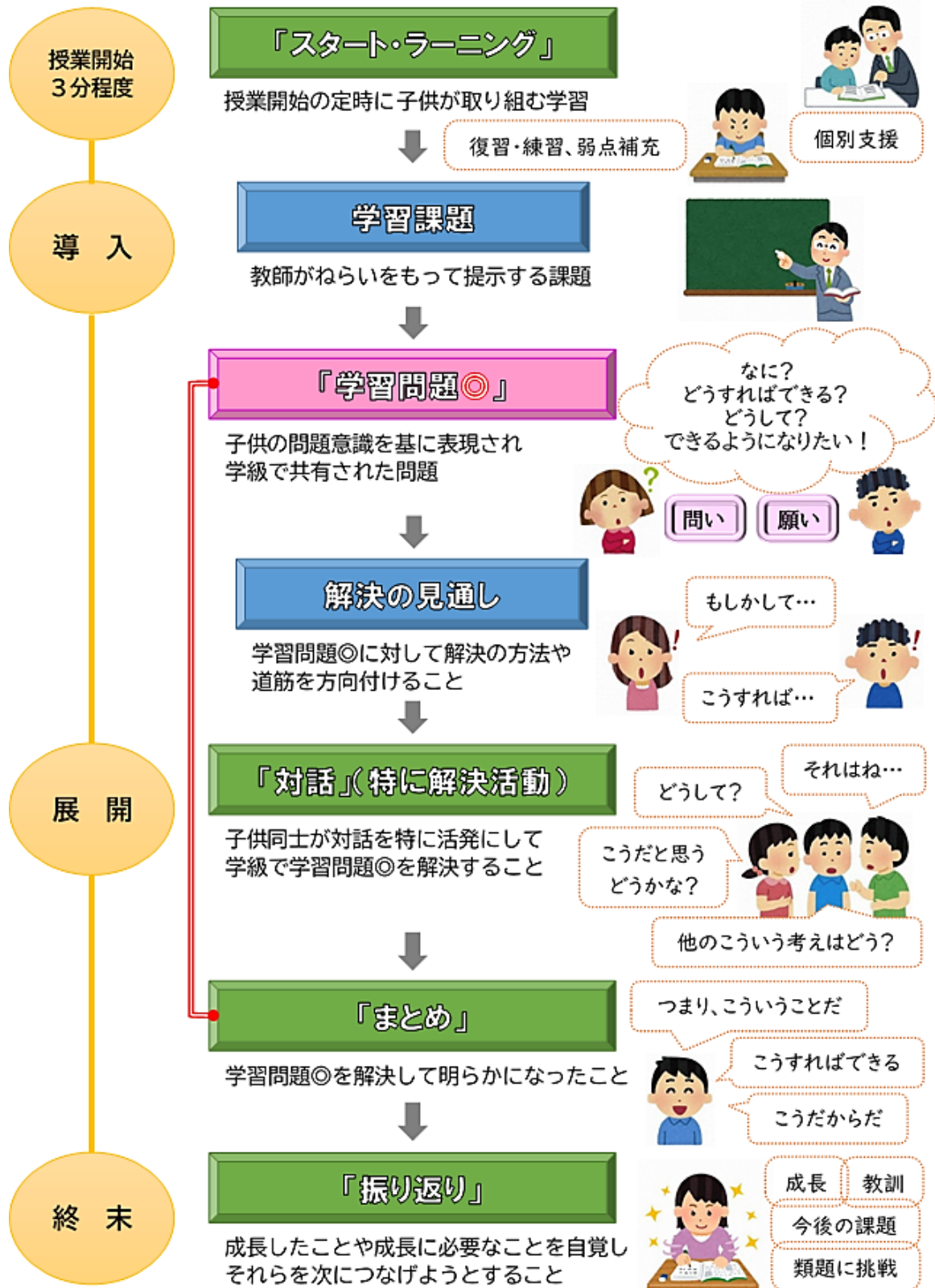
三条市が小中一貫教育の取組を始めてから、これまで、多くの教職員の皆様の御尽力により、落ち着いた学校、笑顔あふれる学校づくりが推進されてきました。

昨年度実施した「小中一貫教育アンケート」の中で、市内児童生徒に「授業を楽しんでいるか（小学生）」「授業に興味を持ち、意欲的に取り組んでいますか（中学生）」という問題に対して、全児童生徒のうち「そう思う」といった肯定的評価が90.3%を占めています。前年には88.1%だったところが、さらに上向きとなった結果を示しています。昨年度は新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受け、行事や交流活動を制限された特異な1年でした。「授業時数が足りなくなるのでは」という声が、市内のみならず全国でありましたが、市内の学校においては、教職員が児童生徒に寄り添い、保護者や皆様の深い理解を得ながら、充実した授業づくり、学級・学校づくりを実施し、進めたことを示すものととらえております。

そうした中で、各校で小中一貫教育の洗練・深化を目指し、小中一貫教育の価値を高めていく年となるようお願いします。感染症の拡大の恐れは絶えません。自己肯定感、自己有用感の高まり、意欲や社会性を育むための手立てとする小中交流、乗り入れ授業等は、引き続き制限されることと思います。その状況の中で、中核となるのは、日々の授業改善です。「子どもの問題意識」、「子どもの思いを大切にする授業」を目指した学習問題②の提示、そして、導入されたICT機器を有効に活用する授業づくりを進めることにより、一人一人を大切にする授業・教育活動を、学園一体で展開していただければと思います。

令和3年度三条市授業スタンダード理解研修

三条市教育委員会では「授業スタンダード」を考え、子供を大切にした授業づくりのためのガイドブックとして令和2年3月市内学校へ配布しました。「三条市授業スタンダード」は、次のように、5つのポイントを押さえた授業枠組みです。ただし、この枠組は教科等に応じて柔軟に用います。



ガイドブックの内容は、昨年度の研修等における教職員との対話を基に更新しました。その内容に対する理解を図るため、本年度三条市に転入された教職員を対象に、本研修を次のように設定しました。

事前研修（オンデマンド方式）

- ・講義：「学習問題◎」を中核とした授業づくり
- ・演習：「学習問題◎」を中核とした本時構想



当日研修（オンラインミーティング方式）

- ・交流：事前研修の内容について他の人の解釈や実践を聞いてみたいことについてGoogle Meetを用い情報交換
- ・アンケート：Google Formsで実施



5月12日の当日研修で話題になったことと、受講者の声を紹介します。

グループ1（担当：星、受講者：2名）

小学校3、4年生における社会科（わたしたちのまちと市、健康なくらしとまちづくり）で、子供が観察・調査し、事実をつかむことの大切さを共有しました。学習問題◎の成立を含め、単元を通じて問題を解決させるためには、子供が実感を伴って事象に出合うことの重要性が、具体例を基に理解されました。

グループ4（担当：今井、受講者：8名）

特別支援学級で複数学年を同時に授業することの難しさが話題になりました。子供のつぶやきから学習問題を設定し、ゴールを見据えて授業づくりをすることは、通常学級でも特別支援学級でも共通して大切であることを共有しました。スタート・ラーニングの事例やタブレット端末の共有シートを活用した事例などが紹介されました。

グループ2（担当：青木、受講者：8名）

スタート・ラーニングや課題解決での個別対応の悩みや、学習問題を子供の問いにすることの難しさなどについて交流しました。個別の対応については、途中参加でもできるスタート・ラーニングの在り方や、皆が同じスタートラインに立てるように条件を整えるなどの事例をお互いに紹介し合いました。

グループ5（担当：荒川、受講者：7名）

学習問題の5つの視点のうち特定の視点が多くなっても良いか、◎設定でどう工夫しているかが話題になりました。スタート・ラーニングは特定の子供とのやり取りにならないようにすることや、安心して間違えることができ間違いを共有する場になると良いという考えを共有しました。端末を活用した話し合い活動の実践も紹介されました。

グループ3（担当：井口、受講者：11名）

学習問題のつくり方として、既習でできたことが通用しない課題を提示するというアイデアを共有しました。対話的な解決活動では、ジグソー法、仲間のノートを見て歩くこと、ホワイトボードを用いたりタブレット端末でノートを写真にとってアップしたりして考えを可視化し共有するという実践が紹介されました。

グループ6（担当：吉田、受講者：8名）

学習問題のつくり方は、興味関心が高まるような事象提示を行い子供の姿やつぶやきを基にする（低学年）、前時の振り返りから導く（高学年・中学校）など発達段階に応じたアイデアを共有しました。対話的な活動では、グループで役割を明確にして話し合わせる、「聞く・話す」の目指す姿を掲示する」等の取組が紹介されました。授業でのICT機器活用についても意見交換しました。

受講者の声（アンケートより一部抜粋）

- ・「演習ワークシート」の作成で、ポイントに沿って1時間の授業の流れを考えることができました。
- ・参加者の皆さんと困っていることを共有でき、同じようなことで悩んでいる人がいることを知ることができました。また、解決の糸口を教えていただくことができました。
- ・学校種別が異なった人と交流することができて有意義でした。
- ・略案をどこかにアップロードして共有できると、考えやすかったかなと思います。

「三条市授業スタンダード」は、校務用全校共有フォルダ内（教育センター ➤ 三条市授業スタンダード）にあります。初版と第2版では掲載してある話題や具体例が異なるので、両方を参照されるとよいと思います。

生徒指導研修会を開催しました

眠りを重視した生活習慣づくりと学校不適應の未然防止
～ネット・ゲームに依存しない子に育てる～

5月7日（金）に生徒指導研修会を開催しました。新潟大学教職大学院 神村栄一教授を講師にお招きし、「眠りを重視した生活習慣づくりと学校不適應の未然防止 ～ネット・ゲームに依存しない子に育てる～」を演題として御講演いただきました。

① その子が不登校になると分かっていたら、学級担任のあなたは どうしますか？

講演は、「タイムマシンで学年末の自分の学級を見たら、5月は元気に登校していたAさんが不登校になっていました。学級担任のあなたは5月に戻ってどうしますか？」というショッキングな質問から始まりました。皆さんはどうするのでしょうか。（後でヒントになる考え方を教えていただきました。）

② 不登校の子どもは学校に行かなくてよかったと思っているか？

文部科学省が2014年に発表した「不登校状態で中学校を卒業した生徒は、5年後、学校に行けばよかったと思っているか」の調査結果を示していただきました。さまざまな状況が考えられますが、「行かなくて正解だった」と思っている生徒はわずか12%で、多くの子は「行けばよかった」と思っていることが確認できました。

③ 不登校リスクを意識することで不登校は未然防止できる

①のヒントになる部分です。不登校リスクの高い児童生徒に「3割増しの配慮」をすることで、新規不登校は半減するとおっしゃっていました。

・「過去の欠席の多さ」は最大の不登校リスク

辛いときの対処方法は年齢を重ねても変わらないのだそうです。小学校1年生の時に辛いことがあって不登校だった子は、その後順調に見えても、中学校3年生で再び辛いことがあれば、不登校という選択をするとのことでした。

・不登校リスクは「うつる」

身近（特に家庭内）に不登校が存在すると、「自分も・・・」と子どもが考えがちになるのは分かるような気がします。

・好き嫌いの多さは不登校リスク

学習、食、人、場所、におい、味、音、感覚、肌触り、性、活動 など

・1週間をとおして起床と就寝が一定でないのは不登校につながる

日曜の睡眠が不十分な子が月曜の朝から調子が悪いのは当たり前ですね。月曜に休みがちな子どもには、休日（特に日曜）の睡眠を家庭と連携して改善することで効果が得られそうです。



【参加者の感想】

- ・学級に睡眠不足を訴える子どもがいます。その子の様子を講演会の内容と照らし合わせると納得できる要因や姿がありました。子どもの背景を考えるための視点がよく分かりました。
- ・一番印象に残ったのは、「リアルの手厚い子育てとネットに放置した子育て」でした。また、19歳の不登校経験者の調査結果は驚きでした。やはり不登校はできる限り防止しなければいけないと思いました。

神村教授が繰り返しおっしゃっていたのは、「リスクのある子どもに3割増しの配慮を！」でした。リスクのある子どもはどの学級にもいるのではないのでしょうか。「不登校になるかもしれない」ことを全職員が共有し、1.3倍の配慮をすることで、「学校に行っておけばよかった」と振り返る子どもがいなくなることを願います。